人面瘦

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人面瘦

【Nコード】

N2924F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

銀行員高岡陽子はスタイル自慢のOL。とりわけ足が自慢の彼女の足に出て来たのは。民話でよくあるようなお話を現代風にアレンジしました。

第一章

人面瘦

高岡陽子は地方の銀行に勤めているごく普通の女性だ。黒い髪をストレートで伸ばし、切れ長めの一重の目にあまり起伏の激しくない普通の顔を持つ本当に普通の顔立ちの女性だった。だがそれでも彼女はわりかし異性に人気があった。これは学生時代からであった。その理由は顔以外にあった。女がもてるのには顔以外に理由がある場合がある。彼女の場合はスタイルであった。日本人離れたスタイルを誇り、とりわけその脚には絶対の自信があった。ミニスカートの黒いストッキングを履けばそれだけでどんな男でも参らせる自信があった。それだけの自慢すべきものであった。

それは同僚達からも羨望的であった。彼女のスタイルはそれ程までによかった。それ目当てで銀行に来る者すらいる程であった。「あの御客様今日も来てるわよ」

同僚の一人が受付の奥でパソコンに顧客のデータを入力している陽子に対して囁いてきた。今の陽子の服は銀行の制服である。スカートの丈は膝までで露出も少ない。自慢のスタイル、とりわけ脚を生かしたものではなかった。それでも見に来る者がいるのである。

「陽子の方をチラチラ見てるわよ」
「嫌ね、何だか」

そうは言っても悪い気はしないのは女としての誇りからだろうか。

「私の方ばかり見て。セクハラよ」
「けれどちゃんと預金はしてくれてるわよ」

同僚はそう言っただけでまた囁いてきた。

「それも結構。いい御客様よ」
「だったらいいけど」

そうした御客ならまだいい。

「それでもね」

そうした客ばかりではないのだ。それが困りものと言えば困りものであった。

「ストーリーだったりしたらね」

「そっちの心配もあるの？」

「今のところはないけれど」

彼氏と同棲している。年下の大学生で冬彦という。飲み屋で知り合ってそのまま付き合いはじめたのだ。商業高校を出てすぐにこの銀行に入った陽子と一歳しか違わないが随分子供っぽい。彼女と比べてみれば彼氏というよりは弟みたいな存在である。

「彼氏いるって公言してるし」

「だから安心してるの？」

「まあね」

同僚に対して答えた。

「一応は」

「タチの悪いのもいるから注意してね、最近は」

「わかったわ、変なのは何処にでもいるからね」

「そうそう、確かあんたの彼氏ってあれだったわよね」

「一応マーシャルアーツやってるけど」

アメリカ軍で作り上げられた格闘技である。日本でもやっている者は多い。

「そうそう、格闘ゲームなんかでよく出る」

同僚はそれに相槌を打った。

「衝撃波でやつつけてもらえばいいじゃない」

「ゲームと現実とは別よ」

陽子はそれを聞いて思わず苦笑してしまった。そしてこう言った。

「あつ、実際にはそんなの出せないの？」

「当たり前じゃない。出せるって話は聞くけどよっぽどの達人よ」

「そうかあ」

「そうそう、まあ一応ボディガードにはなってくれてるから」

「安心ね」

「車で送り迎えもしてくれるしね」

「彼氏って便利ね」

「旦那になったらもつと便利かも」

「こちらから」

「うふふ」

そんな半分のろけが入った話をしながら仕事をしていた。仕事が終わるとすぐにロッカールームに向かつて着替える。愛想のない制服からうって変わって派手な私服になった。

「相変わらずね、私服は」

「どう？今日のは」

黒いストッキングに白いタイトのミニ、上は青のタンクトップとスカートと同じ白い上着であった。露出、とりわけ脚を意識した服装であった。

「目立つわよ」

「遊びに行くみたいよ」

「彼氏と待ち合わせてデートなのよ」

やはりここでものろけていた。

「これからね。明日休日だし」

「その脚でいたいけな大学生たぶらかして」

「悪いんだから」

「まあまあ。それに敦君だってこんな格好してくれないと不機嫌になるし」

「彼氏も？」

「ええ」

陽子は答えた。

「折角だからって。脚見せてくれって」

「元気ね、本当に」

「歳下の彼氏って」

「まあ、こっちもね。それではりきっちゃうけれど」

「じゃあ頑張って彼氏の要求に答えるのね」

「一応応援はしてあげるわ」

「ありがと。それじゃあね」

「ええ」

銀行を出る。そして入り口のところで彼氏の車を待つ。銀行が終わるのは遅い。もう外は真っ暗であった。陽子はそんな中で腕を組んで立っていた。そして彼氏の車を待つのであった。

道に行く男達が思わず振り返る。陽子のスタイル、とりわけ脚に目がいくのである。陽子の方もまんざらではない。心の中で男達の視線を楽しんでいた。

(もつと見ればいいわ)

心の中でそう呟く。

(もつとね。こっちだってその為にこうした格好しているから)

タイトはかなり短く腿の付け根までである。その二本の脚が露わになっている。その脚を立ちながら組んでいる。そして道行く男達に見せていたのだ。

胸もはつきりとタンクトップから浮き出ている。谷間が見えそうである。これもあえてそうしているのだ。彼氏に言われたというのは嘘であった。彼女は自慢のスタイルをそうして他の人間に見せていたのである。見せずにはいられなかったのだ。

暫くして車が来た。シルバーのデミオだ。誰の車かすぐにわかった。

「お待たせ」

窓が下ろされ中からあどけない顔立ちだが大柄で筋肉質の青年が顔を出してきた。彼が陽子の彼氏である敦だ。彼女より一つ下の大学生なのは本当のことだ。

「待った？」

「待ったわよ」

陽子は意地悪そうに笑って彼氏にこう返した。

「おかげで危ない目に遭いそうだったんだから」

「嘘っ」

「嘘よ」

今度はにこりとした顔になって言った。

「驚いたかしら」

「少しね。御免、ちよっと道が混んで」

「そうだったの」

「うん、今渋滞気味なんだ」

「それだったら。ドライブは止めた方がいいかしら」

陽子は言った。

「どうする？そこんどこ」

「とりあえず車の中に入っていい？」

「ああいいよ、どうぞ」

「ええ」

陽子はそれに従い車の中に入った。助手席に座った。

車の中で脚を組む。その奥にあるものが見えそうである。それが見えはしなくとも思わず目がいつてしまう脚がそこにある。黒いストッキングに覆われたその脚が敦の目に入っていた。

「で、これからどうするの？」

助手席に座った陽子は隣にいる敦に尋ねた。

「ドライブが駄目だったらレストランとかカラオケも」

「ドライブは明日にしないかい？」

敦は陽子の脚を見ながら言った。陽子も見られているのはわかっている。あえて彼氏に見せているのだ。

挑発していると同時に自分も満足していた。見せていることと見られていることに。彼の視線が何よりも心地よかったのである。

「明日にするの？」

陽子は敦の視線を感じながら言った。

「うん、また明日で」

「じゃあ今日は？」

「今日は。家で遊ぶ？」

「ゲームでもして？」

「いいゲーム買ったから。格闘ものでさ」

「じゃあそれでいいわ」

「お酒でも買ってね」

「ええ、それで遊びましょう」

「うん」

その場はあっさりと話が進んだ。車の中では相変わらず彼に自分の脚や胸を見せていた。そしてアパートに着いた。早速お酒を飲んでゲームをはじめた。その時陽子はずっと銀行を出た時と同じ格好であった。

「着替えないの？」

「だって見て欲しいもの」

今度は恋人として言った。

第二章

「敦君に。私の脚」

「脚だけ？」

「脚だけじゃないわ」

甘えて言った。

「身体全部」

「それじゃあさ」

無論これは陽子の狙いだだったが敦もその気になってきた。

「これから」

陽子の身体に手を添えてきた。その肩を掴んできた。

「ええ、いいわよ」

彼が何をしたいのかよくわかっている。にこりと微笑んで言った。

「だから。来て」

「うん」

ゲームをそのままに二人はその場で抱き合った。そのまま敦が上になって倒れ込む。それから暫くの間二人で同じ時間を過ごしたのであった。

それが終わった時にはもう深夜になっていた。二人は裸のまま一息ついていた。

「もう遅いね」

「そうね」

陽子は敦の言葉に頷いた。二人共かなり汗をかいていた。

「どうする？もう寝る？」

「その前に御風呂は入らない？」

「御風呂？」

「それで汗を流してね。寝ましょう」

「そうだね。それじゃあ」

「敦君が先に入って」

「いいの？」

「うん、私少し落ち着きたいから」

缶ビールを手にとって答える。

「後でいいわ」

「わかったよ、それじゃあ」

「ええ」

敦が先に風呂場に向かった。二人のいるアパートは風呂場もトイレもある。ユニットではない。アパートといっても結構整っているものである。

風呂場からシャワーの音がする。暫くしてそれも止み敦が髪の毛を拭きながら部屋に戻って来た。派手な柄のトランクス一枚であった。

「次、陽子ちゃんの番だよ」

「わかったわ」

互いのことを君付け、ちゃん付けで呼んでいる。愛称だった。歳下でもそうして愛称で呼ばれることに抵抗がなかった。その方が恋人だと実感出来たからである。

陽子は残ったビールを飲み干すと風呂場に入った。そしてシャワーを浴び頭と身体を洗いはじめた。情事でかいた汗が落ち、身体が清められていく。彼女は上機嫌で身体を洗っていた。

「明日はドライブね」

もう明日のことに想いを巡らせていた。

「それでレストランに行つてカラオケ行つて」

考えるだけで楽しみになってきた。その時だった。

『見て』

不意に声が聞こえてきた。

「!？」

それに気付いてシャワーを止める。そして耳を澄ませる。だが何も聞こえなかった。気のせいだと思った。

「気のせいね」

そう思つてシャワーをまた開いた。汗を洗い落として身体と髪を拭く。それからコバルトブルーのブラとシヨーツを着ける。そのまま部屋に戻ると敦がまた飲んでいて、トランクス姿のまま胡坐をかいて飲んでいた。

「寝るんじゃないの？」

くすりと笑つて恋人に言う。

「これ飲んでから」

彼はそう答えながらビールを飲んでいて。

「寝るよ。まだあるしね」

「結構買ったからね」

見ればテーブルの上にはまだ幾つか缶を開けていないビール缶が幾つかあった。敦も陽子も酒は好きだ。だから結構買ったのだ。

「じゃあまだ飲むの？」

「うん、飲むよ」

彼はそれに答えた。

「まだ飲めるしね」

「じゃあ私も」

彼女もそれに付き合うことにした。

「今日は飲みましょう」

「そうだね。二人でね」

「ええ」

互いに下着姿のまま飲みはじめた。あの声はもう聞こえなかった。結局気のせいだと結論を出して楽しく飲みはじめた。飲み終えた二人が起きたのは翌日の朝だった。ダブルベッドに二人で寝ていた。二人共下着姿のままである。

起きてパンとミルクの簡単な昼食を済ませるとまずは歯を磨いて顔を洗った。昨日の酒は残ってはいなかった。

「それでドライブ何処に行くの？」

陽子は着替え終えてテーブルの上に置いた鏡の前に座って化粧をしていた。リップを塗っている。紅いルージュであった。

服はやはりミニスカートであった。ラフな黒いジーンズのものだ。今度は素足を出している。上は赤い半袖のブラウスだ。首にはネックレスをして自然にそちらに目がいくようにしてある。やはり見せる格好であった。

「山にでも行く?」

「山?」

「それとも海か。どっちがいい?」

「山や海より街がいいわ」

陽子はリップを塗った後でこう言った。

「街!?」

「ええ、軽くショッピングしてレストランで食べて」

「レストランって言ってもあれだろ、いつものファミレス」

「わかってないわね、ファミレスだからいいのよ」

陽子は敦に言い返した。彼はもう準備を整え彼女の横でゲームをしていた。昨日二人でやっていた格闘ゲームだ。今度は一人でプレイしていた。

「色々なものが食べられるから」

「味も安定してるしね」

「そういうこと。それからカラオケ行って」

「それだけ?」

「それだけって?」

「いや、それだけだと時間が結構余るからさ、今まだ八時だし」

「ええ」

「時間かなりあるよ。他には何処が行かないの?」

ゲームをしながら尋ねてくる。

「他にはって言われても」

陽子は少し困った顔になった。

「今は。別に買いたいものもないし」

服もバッグも化粧品も。今欲しいものはもう買っていた。この前二人で買いに行ったのだ。

「本もDVDもね」

「買いたいものはあるって?」

「ええ、だから」

「じゃあ、プールにでも行く?」

「プール!？」

「ほら、新しい水着買ったじゃない」

「相変わらずゲームをしながら言う。」

「だったらさ、行こうよ」

「この辺りにプールなんてあったかしら」

「あるよ、スポーツジムにね」

「へえ」

「それでさ、そこで泳がないか?」

「いいわね」

その申し出ににこりと笑って応える。

第三章

「けれどお化粧が」

「あつ、そうか」

「けどいいわ。泳いだ後でまたすればいいだけだし」

「それじゃあ」

「ええ行きましょう、それでどんな水着がいいの？」

「そうだなあ。それじゃあ」

そんな話をしてからドライブに出掛けた。まずはショッピングだ。だがこれは軽く本屋やCDショップを覗いただけであった。新作のチェックだ。この前買いたいものを買ったばかりだったのでこれといってなかった。のだ。元々ショッピングに行くのは主な目的ではなかった。後はレストランに行ってカラオケに行った。軽く遊んだ後でプールに向かった。

陽子は更衣室に入るとすぐに裸になった。そして水着を取り出す。「うふふ」

水着を見て笑う。この前買ったばかりの水着だ。それを眺めて笑っていた。

「これを着てね」

敦に、そして他にプールにいる客に見せる。水着でかえって強調された自分のスタイルを。

水着は白いシンプルなワンピースだ。あえてワンピースを選んだのだ。

それは何故か。ビキニよりもスタイルが強調されるからだ。実はビキニは案外スタイルを誤魔化すことが出来るのだ。胸と腰を覆うだけなので身体全体のスタイルは出ない。それに露出の多さでどうしてもそちらに目がいく。グラビア等でアイドルがよくビキニになるのもそれであった。露出が多く、スタイルの細かい部分が誤魔化される。だからワンピースよりもビキニの方が多かつたりするので

ある。

だが陽子は違っていた。自分のプロポーションに絶対の自信がある。だからこそこれを選んだのだ。

水着を見て笑っている。だがここでまたあの声が聞こえてきた。

「見せたい」

「!？」

陽子はその言葉を聞いて辺りを見回した。だが更衣室には今は彼女の他は誰もいない。今丁度高校生位の女の子が入って来たところだった。

「やっぱり見せたいわよね」

「そうそう」

彼女達は底抜けに明るい声でキャツキャツと話していた。

「だからビキニ買ってね」

「わざわざプールに誘うのよね」

「うんうん」

「あの娘達かしら」

ふと昨日のシャワーの時も思い出したが少女達の話の話を聞くとそちらに考えがいった。

「見せてそれで悩殺して」

「そうよ、水着は見せる為のもの、女の武器よね」

「それを覚悟でこっちだっただけ着るんだから」

「やってやるわよ」

「随分張り切ってるわね」

陽子はその話を少女達を眺めてくすりと笑った。

「彼氏作るのに必死で。何か昔の私みたい」

そしてかつての自分も思い出していた。

「焦ってそれで失敗して、それでもまた起き上がった」

それが恋というものである。

「そして掴んでそれからもああだこうだっただけすったもんだで。今もね」

敦のことを思う。するとまた見せなくなる。いそいそとした動作で水着を着ける。そしてプールサイドに出るのであった。

事前に化粧を落とす。化粧をつけていてもつけていなくてもやはり平凡な顔立ちだ。だがそのスタイルは。陽子の狙い通りプールサイドにいる客の目を釘付けにした。

「おいおい、すげえあの女」

「ああ、モデルかな」

男達がヒソヒソと囁く。

「凄いプロポーションよね」

「そうよね」

「何かの雑誌みたい」

女の子達も。見ればさっきの高校生達もいた。彼女達はもう着替えていた。見ればピンクや黒の派手なビキニに身を包んでいた。

「負けちゃそ」

「じゃなくって負けてるって」

「あんな人がうちの高校にいらなくてよかったね」

「絶対負けてたね」

「そうよね」

陽子はそれを聞き流していた。表面では。内面ではその言葉を耳にして胸を誇っていた。そこへ敦が待っていた。

「御免御免」

「もう、遅いじゃない」

「水着探すのに手間取ってさ」

がっしりとした大柄な身体を見せている。水着は黒のトランクスタイプだ。何処にでもある何の変哲もない水着だ。実は陽子のものもそうだがその中身が違っていたのだ。だからこそ人の目を惹き付ける。また、彼氏がいるのを知った他の客達は密かに、だが大いに落胆していた。

第四章

「何だ」

「彼氏持ちか」

「しかもあんな身体の奴かよ」

「こりゃ駄目だ」

「諦めようぜ」

「仕方ないな」

そんな話をして陽子から視線を外す。だがまだチラチラと見ている。それは身体全体ではつきりと感じていた。同時に女の子の視線も。

「よかった、彼氏いたのね」

「あの人にいったらどうしようかと思ったわよね」

「そうよね、全く」

彼女達は彼女達で陽子をチラチラと見ながら話していた。

「それが何もなくて」

「よかったわよね」

やはり彼女達の視線も感じる。それに内心であるが満足感を覚える。それに気をよくしながら敦に声をかけた。

「泳ぐ？」

「準備体操は？」

「もう済ませたわ」

水着を着てすぐに。それは忘れていなかった。

「じゃあいいよね」

「ええ」

敦はこうしたことには細かい。やはり格闘技をやっているだけあって準備体操やその後のアフターケアには厳しかった。それをしないと怪我をすると言う。陽子もそれは当然だと思い彼の言う通りにしていた。

プールに入る。そして二人で遊びはじめた。

中で敦の身体にもたれかかりながら甘えたりする。プールの中のカップルがよくすることでありよく見られる姿であった。二人は今そうした時間を楽しんでいた。

その時であった。またあの声が聞こえてきた。

「見せたい」

女の声で。敦もそれに気付いた。

「今何か言った？」

「えっ、いいえ」

陽子はそれに答える。今度ばかりはギョツとしていた。

「何も言っていないけど」

「じゃあ一体誰が」

「ねえ見てみる？」

プールの端からまたあの高校生達の声が聞こえてきた。

「水着の中。どう？」

「えっ、いいよそんなの」

「気にしなくていいのよ」

「ほらほら」

あの娘達がそう言って一緒に来ている男子高校生達をからかっていた。半分誘いのからかいである。

「プールに入るうよお」

「う、うん」

半ば強引に手を掴んでプールの中に引き摺り込もうとしていた。

「見せてあげるから」

「それはいいって」

「遠慮しないでよ」

「あたしは遠慮していないしさ」

「そういう問題じゃなくて」

「まあまあ」

「一緒にね」

「何だ、あの娘達か」

敦は彼女達を見て言った。

「誰かと思ったら」

「またあの娘達ね」

陽子は彼女達を見て困った様な苦笑いを浮かべた。

「着替えの時も騒がしかったし」

「そうだったの」

「そうなのよ。また何か声が私に似てる娘もいるし」

「そういえばそうだね」

今話している声を聞いて敦もそれに頷いた。

「あの娘だね」

「ええ」

その中の一人が指差されると陽子はそれに頷いた。

「何かと思っただよ」

「そうよね、私も」

陽子は内心胸を撫で下ろしていたがそれは隠していた。そして敦に声をかけた。

「まあ何かわかったし」

「そうだな、こっちはこっちで楽しくやるか」

「泳ぎ教えてよ」

「って陽子ちゃん泳げるじゃない」

「バタフライよ、私あれできないのよ」

「そうだったっけ」

「上手くはね。だから教えて」

「わかったよ、それじゃあ」

「ええ」

二人はバタフライだけでなく他のことも教わっていた。そしてプールの中で楽しい時間を過ごしていた。それが終わりアパートに戻る頃にはもう疲れ果てていたが心地よい疲れであった。

「部屋に帰ったらどうする？」

敦は車を運転しながら陽子に尋ねてきた。

「そうね」

陽子はそれに応えて口を開いた。

「まずは夕食は」

「途中で食べないか？ 疲れてるしさ」

「じゃあそれでいいわ」

「ラーメンか何かでも」

「ハンバーガーにしない。何でもいいけど」

「ファミレスは昼に行つたしな」

「それ以外なら何でもいいわよ」

こう断る。

「じゃあ適当なところで」

「ええ」

「そして家に帰つたら」

「水着は洗濯機に入れてね。それで」

「御風呂に入つて？」

「シャワーだけね。それでもう寝ましょう」

「ビールは……もういいか」

敦はこう言つて諦めた。

「昨日あれだけ飲んだし」

「飲み過ぎると太るからな、あれも」

「太った私は嫌でしょ」

「まあね」

陽子の言葉に応えてにこりと笑つた。だが車を運転しているのだから彼女の方には振り向きはしない。そうした分別はちゃんとあったのである。

「陽子ちゃんだつて嫌だろうし」

「ええ、嫌よ」

彼女もそれを認めた。

「太る位なら最初から飲まないわよ」

「あまり、ね」

実は陽子は酒好きである。それもビールや甘いカクテルが好きだ。一緒にソーセイジや脂っこいものがあると尚更いい。だから太る要素はあるのだが彼女はそれには自分も気をつけているのである。

「まあ気を着けるのはいいことさ。健康の為にもね」

「そうよね」

「じゃあ今日はこのまま食べてそのまま帰って」

「シャワー浴びて寝ましょう」

「うん」

二人は適当に夕食を済ませて部屋に帰った。まず敦がシャワーを浴びた。次は陽子の番だった。

陽子は服を脱ぎ風呂場に入る。そして湯を出しながら今日のことを考えていた。

「楽しかったけど何か引つ掛かることがあったわね」

あの声のことだ。高校生の声だとはわかったが。

「何だったのかしら。見せたいだなんて」

その声が。昨日ここでも聞こえたのを思い出した。やはり気になる。

だが考えてもどうしようもない。シャワーで身体を濡らし洗いはじめる。髪を洗い、次には身体だ。スポンジにバスタオルをつける。上から下へと洗っていく。その時またあの声が聞こえてきた。

「見せたい」

「!？」

陽子はその声にギョツとした。思わず辺りを見回す。

「またあの声」

だが誰もいない。いる筈もない。今このアパートの部屋にいるのは彼女と敦だけである。しかも風呂場にいるのは。他に誰かいる筈もないのだ。

「見せたい」

また聞こえてきた。今度は聞き間違えようがなかった。確かに彼

女以外の誰かが声を発していた。それを認めるしかない状況であった。

「誰なの!？」

誰もいない筈なのに。声だけが聞こえる。あまりにも異様なものがそこにはあった。

誰もいないのがわかっていても辺りを見回す。そしてまた声が聞こえてきた。

「見せたい」

耳を澄ませる。それは下の方から聞こえてきていた。

「見せたい」

そしてまた。慌てて下に目をやる。それは泡がまだ残っている自分の脚、腿の内側にあった。隠れていたのだ。

第五章

「きゃああああああああっ！」

自分の脚にあるそれを見て陽子は叫んだ。その叫び声を聞いて敦が慌てて風呂場にやって来た。

「陽子ちゃん、どうしたの!？」

「脚が、脚が」

その場にへたりこんで叫んでいた。自分の脚を見ながら。

「私の脚に。顔が、人の顔が」

「顔がつて」

敦はその言葉に首を傾げながら陽子の側にやって来た。そして彼女の脚を見る。

「えっ……」

それは確かにあった。陽子の整った脚の内側にそれはあった。

人の顔がはつきりと浮かび出ていた。そして眩いていた。見せたい、見せたいと。はつきりと言っていたのであった。

「これって、まさか」

とりあえず彼は陽子の身体の泡を落としてタオルで拭いて風呂場から出させた。そしてシヨック状態になっている彼女に声をかけるのであった。

「陽子ちゃんの脚にあるものだけどね」

「うん」

服も敦に着せてもらった。下着だけであるが。彼女は白いブラとショーツのまま敦の側にへたり込んでいたのである。まだ呆然として夢現の様な返事ではあったが。

「それ、多分人面瘦だよ」

「人面瘦」

「ほら、漫画でよくあるじゃないか」

彼は陽子に分かり易くそう語りはじめた。

「身体にさ、人間の顔をした出来物が出来るの。あれだよ」
「それ読んだことあるわ」

陽子はまだ呆然としていたがそれに答えた。

「それで話すのよね」

「そう、今みたいだね」

「それだったのね」

「まあそうだろうね。実際にそれ話すんだろ？」

「うん」

彼の言葉にこくりと頷いた。

「見せたい、見せたいって」

「じゃあお昼のもそれだったんだ」

敦はそれを聞いて納得した。

「間違いないね、それだと」

「どうすればいいの？」

陽子は敦に俯いたまま尋ねる。自分ではどうしていいかわからなかった。

「こんなのあったら。もう生きていけないわよ」

泣きそうな顔になっていた。勝気な陽子が。実際泣いても不思議ではない状況であった。

「どうしたらいいの、ねえ」

「そうだなあ」

彼はそれに応えて腕を組んで考えながら言った。

「手術とかで取るのが普通の出来物だけねど」

「そんなので大丈夫なの？こんな気味悪いもの」

「気味が悪いとかそういうのは問題じゃないけれどね。けれどこれって多分お医者さんとかそういう問題じゃないだろうしね」

「そうよね」

それは何となくわかった。それどころではない話だ。

「やっぱりこれって」

「御坊さんとかそういう話だと思っけれど」

「誰かいい人知ってる？」

困り果てた声で敦に尋ねる。

「何処かに」

「一応知らないわけじゃないよ」

陽子にとつて非常に運がいい話であった。敦はこの話を解決出来るつてがあつたのだ。陽子はそれを聞いて思わず顔を上げるのであつた。

「本当!？」

「ああ、俺の実家の側だけれどね」

彼は言った。

「暫くさ、会社を休むことになるけれどいい?こつちも学校を休むけど」

「ええ、いいわ」

その言葉にこくりと頷いた。

「これが。どうになるのなら」

「よし、それじゃあ」

話は決まった。翌日朝起きると敦はすぐに陽子を車に乗せた。そしてそのまま彼の実家に向かうのであつた。

「それってさ、放っておくと危ないらしいんだ」

「そつなの!？」

二人は車中で話をしていた。陽子は敦のその言葉に驚きの声をあげた。

「まあこれって漫画とか小説とかそつした本での知識だけれどね」

「ええ」

「よからぬもののせいだからだつてさ。だから」

「このままだと憑かれて」

「そつはなりたくないよね、だから」

「すぐにでも」

「そつさ、そこに付いたら詳しい話をしよつ」

「うん」

こくりと頷いた。車は高速を出てそのまま道をひた走る。一日程進むとようやく車は止まったのであった。かなり長い旅であった。だが敦はまだ余力があった。

「ここだよ」

彼は陽子が今まで来たことのない街に着いたところで彼女に声をかけてきた。見れば陽子はうつらうつらと眠っていた。

「えっ!？」

その言葉に目を覚ます。そしてその身も知らぬ街を見た。

「ここ!？」

「そうさ、ここだよ」

敦は言った。車の速度はかあんり穏やかになっており、彼は街中をゆっくりと進んでいた。その中で陽子に声をかけてきたのである。

「ここが俺の実家のある街なんだ」

「そうだったの」

「どうだい? いい街だろう」

「ええ、そうね」

車で一日だからかなり離れている。だがいい街なのは事実だった。今二人が住んでいる街は海辺の街である。だがこの街は山と緑に囲まれている。これはこれで非常に風情のある街であった。陽子はそう感じていた。

「どうする? すぐにそこに行く?」

「そうね」

敦の問いに応えた。

「ここに敦君の実家があるのよね」

「ああ」

「そこに寄ってからでもいいよ」

「じゃあそこに車を止めるか」

「そうするのね」

「ああ、それでその足でそこに行く。それでいいだろ」

「任せるわ、それは」

「わかったよ、それじゃあ」

敦は陽子と簡単に実家に挨拶をして車を止めた。もっと親とは話をしたかったが今はそんなことを言っていられる状況でもなかった。車を置いてすぐにそこに向かうのであった。

「まあ、じっくりとした話は今度だな」

「ええ」

「夏休みにでもさ」

「今は仕方ないわよね」

「そうだな。それでそこだけけど」

「どんなところなの？」

「目の前にあるぜ」

「目の前って」

敦は目の前を指差した。そこには古いお寺があった。何の変哲もないただのお寺であった。

「ここ？」

「ああ、ここさ」

敦は答えた。

「この住職さんがそうしたこと強いんだ。詳しい話はここだな」

「ここなのね」

「そうだけど。何か？」

「うん、ちよっとね」

その古い建物に恐怖を覚えたのだ。何処か幽霊が出てきそうな感じが漂っていた。普段ならそうでもないのだが今は人面瘦のこともあり気弱になっていた。だから不安を感じていたのである。

第六章

「大丈夫だった。いや」

陽子を安心させようというところでふと顔を上げた。

「それだと」

「何かあるの？」

「陽子ちゃん今スカートだよね」

「ええ」

見れば膝までの白い涼しげなスカートである。いつものミニスカ
ートではないがスカートなのは変わらなかった。

「それだと。まずいかなあ」

「まずいの？」

「だってさ、脚見せるんだよね」

「あっ」

言われてようやく気付いた。

「住職さんを刺激するからね。それに陽子ちゃんだってまずいだろ」
「え、ええ」

流石に下着まで平気で見せる趣味はない。確かに自分の身体を見
せたいという願いは常にあるがそれはあくまで胸や脚、よくて背中
までであり下着までおおっぴらに見せる気はないのである。そうし
た極端な、変態的なまでの露出症というわけではなかったのである。

「ちよつと。他で買うか」

「ズボンを」

「半ズボンでいいよね」

「そうね、そうじゃないとまずいわね」

それはよくわかった。腿の内側を見せるのだからこれは当然だっ
た。

「確か実家に」

「敦君のズボンじゃブカブカよ」

「それはそうだけど」

他にある場所を思いつかないのだ。店が開くにはまだ早かった。

「けれどさ」

「困ったわね」

「俺のトランクスなんかどう？」

「それでも同じでしょ。それに結局下着じゃない」

「そうだよな」

言われて引っ込めるしかなかった。確かにこれも同じだった。それどころかもっとまずかった。陽子にとっても冗談ではない話であった。

「とりあえず実家に帰ろう」

「戻るの？」

「妹がいるから。あいつにでも借りて」

「妹さん持つてるかしら」

「何着か持ってたよ」

「けれどサイズが」

「そんなの細かいことは気にしない。いいから早く」

「もし合わなかつたら」

「その心配は後、とりあえずは」

「ちよ、ちよつと待つてよ敦君」

二人はまた実家に戻った。陽子は敦に連れられる形であったが。

それでも連れて行かれた。とりあえず多少のすったもんだの末に陽子は何とか着替えることができた。黄色い半ズボンであった。

「きついなあ」

陽子は敦の実家を出る時こう呟いた。

「借り物だから妹さんには悪いけれど」

「あいつ陽子ちゃんみたいにプロポーションよくないからね」

「そうじゃないわよ、何か悪いわよ」

彼の妹に気兼ねしているのである。その口を波線にして苦い顔をしている。

「妹さんに」

「けれど仕方ないじゃない」

「スパッツでも持って来ればよかったわ」

「今更言ってもね。仕方ないよ」

「それはまあそうだけれど」

「まあ行こうよ、今は」

「ええ」

ここまで話が進んでは仕方なかった。こくりと頷く。そしてお寺に戻った。敦が案内をするとお寺の中から痩せた飄々とした感じの老僧がやって来た。

「おう、坊主か」

「住職さん、お久し振り」

敦がその老僧に挨拶をする。どうやら彼がその人面瘦を何とかしてくれる人らしい。敦の挨拶からそれはわかった。

陽子も彼に続いて挨拶をする。すると住職さんは彼女に顔を向けてきた。

「ほっ」

「どうかしたのかい？」

「坊主もやつとそんな歳になったのじゃな」

その細い目をさらに細めてこう言った。

「嫁さんをわしに紹介しに来たのじゃな。よいぞよいぞ」

「いや、嫁さんとは少し違うけど」

敦の方でそれを訂正した。

「今付き合ってるんだ」

「おおそうか、彼女か」

「そんなところ」

「よいぞよいぞ」

住職さんはそれを聞いて破顔大笑した。その好々爺の顔が大きく笑う。それを見て陽子はこの住職さんによい印象を受けたのであった。

「で、どうしたのじゃ？」

「ここでは話しくいから」

敦は少し周りを気にして言った。

「お寺の中で。いいかい？」

「何か訳ありのようじゃな」

「お願いするよ。それでいいかな」

「わかった。では茶でも飲みながらな」

「うん」

三人はそのまま境内に入った。そしてそこで話をはじめた。話通りお茶を飲みながらの話し合いとなった。

「それでじゃ」

「うん」

住職さんはくつろいだ様子であったが二人は違っていた。戸惑っている様子がありありとわかるものであった。

「何用じゃ、一体」

「実はさ」

敦はそれを受けて話をはじめた。陽子の方をチラリと見てから言った。

「彼女のことなんだけれど」

「はじめまして」

陽子はここで住職さんに挨拶をした。ペこりと頭を下げる。

「敦君の彼女で高岡陽子といます」

「陽子さんじゃな」

「はい、実は私のことで」

「その顔から察しますとじゃ」

住職さんは陽子の表情から並々ならぬものを感じていた。

「貴女は。何かお悩みですな」

「はい、実は」

「彼女の脚にね」

敦も話した。

「人面瘦が出来ているんだ」

「人面瘦とな」

「御存知なんですか？」

「無論。何度も見たことがある」

住職さんは陽子の言葉に大きく頷いて答えた。

「では見せてくれぬか」

「いいんですね？」

「怖がることはないぞ。さあ」

「それじゃあ」

座っていた脚を崩して住職さんに見せる。形のよい脚が露わになっていた。それは付け根まで見えている。それを住職さんに見せていた。

「よい形の脚じゃな」

その脚を見た住職さんの最初の感想である。

第七章

「敦もまた。いい彼女をもらったのう」

「まあね」

「して、その脚じゃな」

住職さんは脚に話題を戻した。

「人面瘦があるのは」

「そうなんです」

「それは」

「ここです」

右脚の付け根を指差した。そこに小さな顔があった。

「これなんです」

「ふむ」

住職さんはその顔を見る。見ればそれは紛れもなく人面瘦であった。

「間違い無いのう」

「やっぱり」

「それは人面瘦じゃ。小さいがな」

「そうなんですか」

「何でこんなのができるんですか？」

敦が住職さんに尋ねた。

「理由は幾つかある」

「幾つか」

「左様、祟りとか。単なる傷がそうだった場合もあれば禍々しい理由もあるのじゃ」

「祟りって」

「それじゃあこれは」

「まあ待て」

青くなつた二人をあえて宥めて言う。

「何もな、そればかりとは限らん」

「はあ」

「他の理由もあるのじゃ。例えばな」

住職さんは説明をはじめた。

「何か、不満や欲望があつた場合に出たり」

「自分のですか？」

「うむ、それがあまりに強かったり鬱屈されておるとな、出るのじゃ」

「そうなんですか」

「それは大抵人面瘦が言っていることからわかる。それは何と云つておるかな」

「見せたいって言っています」

陽子はそれに答えた。

「見せたい、か」

「はい。シャワーを浴びている時とかプールにいる時とか。そんな時に言っんです」

彼女は俯いてそう述べた。

「肌を出している時にじゃな」

「そうなんです。他にはないですけども」

「うっむ」

住職さんは法衣の中で腕を組みながら考えていた。考えながらちらりと陽子を見る。

「陽子さんじゃったな」

「はい」

陽子は応えた。

「見たところ、かなりのプロポーションじゃな。まるでモデルじゃ」
「有り難うございます」

「それで正直に聞きたいのじゃが。そのプロポーションは自分でも自信があるじゃろっ」

「えっ」

思いもしない言葉であった。心霊かそんな言葉だと思ったのに。その言葉に戸惑いを見せた。

「どうなのかな。おありかな」

「えっ、ええまあ」

陽子は素直にそれに答えて頷いた。

「あります」

「そうじゃろうな、それだけのプロポーションじゃと」

住職さんはその言葉を聞いて納得した様に頷いた。

「他の者に見せたいのかも思っじゃろ」

「おわかりなんですか？」

「やはりそうじゃったか」

どうやら当たりだったらしい。住職さんはにんまりと笑った。

「これでわかったぞ」

「原因がわかったんですか？」

「うむ、全てな」

敦にも述べた。

「理由はな、陽子さんの心じゃった」

「私の」

「そのプロポーションを他人に見せたい、見せたいと思うからな、起こったことだったんじゃ」

「そうだったんですか」

「うむ、その人面瘦はその表われじゃ。人に自分の身体を見せたいと思うから出て来たのじゃ」

「はあ」

「何、心配することはない。それはすぐに消える」

「消えるんですか!？」

「ただしじゃ」

ここで住職さんは言った。

「わしは今言ったな。これは陽子さんの心の表われじゃと」

「はい」

「それじゃ。そのせいで出ておるから」

「見せたいと思う気持ちを抑えるんですね」

「そして実際に露出の多い服を着ないことじゃな。派手な服とか好きじゃろ」

「それはまあ」

「それも認めた。」

「いつもミニスカートとかタンクトップですから」

「よくないのう。それは止めた方がいいな」

「わかりました」

「何もシスターとかそんなふうに厳かになる必要はない。自然な格好でおればよい」

「それでいいんですか」

「露出さえ多くなければな。それでよいのじゃ」

「はあ」

「後は見せたいという気持ちじゃ」

「気持ち、ですか」

「うむ」

住職さんから飄々とした感じは消えていた。厳かな風格を漂わせていた。顔は同じだが雰囲気がるで違う。別人と言っても差し支えない程であった。

「それを抑えるのじゃ」

「今までそれがあつたから人面瘦が出来たんでしょうか」

「その通り。まずは我慢しなされ」

「我慢」

「そうすればそれはなくなる。よいですかな」

「わかりました。それじゃあ」

「うむ、大変だと思つが我慢されよ」

「それで先生」

「敦が彼に尋ねてきた。」

「原因はわかりましたけど肝心の人面瘦は」

「こいつじゃな」

陽子の腿の奥のそれを指差して言う。何か口をモゴモゴとさせている。

「はい、今すぐに何とかしたいんですけど」

「心配無用じゃ」

だが住職さんはその心配を取り払った。落ち着いた声で述べる。

「今すぐになおしてしんぜよう」

「今すぐにですか？」

「そうじゃ。それがどうかしたのか」

「いえ、その」

敦は口籠る。そしてそのうえで述べた。

「今ここには手術台とかそんなのないですけど」

「手術!？」

「刃物で切るとかですよ。だったら」

「いらぬ心配じゃ、これには手術などは不要じゃ」

「いらぬいんですか」

「そうじゃ。これは普通の出来物ではないぞ」

彼は述べた。

「言うならば呪いとかそういう類じゃ。そんなものに手術が必要か？」

「そう言われると」

「そうじゃろう。まあ見ておれ」

住職さんはそつと陽子の太腿に手をかざした。それは一瞬のことであつた。

「あつ」

人面瘦はそれで消えた。一瞬のことであつた。住職さんが手をかざただけでそれは忽ちのうちに消えてしまったのであつた。まるで煙の様に消えてしまった。

「こついうことじゃ」

住職さんは陽子から離れて答えた。

「こうしたものはな、これが一番じゃ」

「法力ですか」

「左様、これですは—安心じゃな」

「はい」

「じゃがな陽子さん、忘れては駄目じゃ」

住職さんの顔はまだ厳しかった。何を言おうとしているのか、陽子にも敦にもよくわかった。

第八章

「見せたいという気持ちを抑えるのじゃ」

「はい」

陽子はその言葉に頷いた。

「服もな。大人しい服で。よいですな」

「さもないとまた出るんですね」

「幾らでも出る。もうそんなもの出て欲しくはないじゃろ？」

「勿論です、もうこんなものが出る位なら」

「そういうことじゃ。その為にはまず心掛けじゃ」

「心掛け」

「用心しなされよ。さすればよいが」

「それを忘れたらまた出るんですか」

「うむ」

住職さんはここで頷いた。

「宜しいですな」

「わかりました」

そして陽子は深々と頭を下げた。それは感謝の礼であった。

こうして人面瘦は消えて二人は住職さんと実家に挨拶をして二人のいる街へと戻って行った。そして車の中であれこれと話をしていた。

「まずは消えてよかったね」

「ええ」

陽子は敦の言葉に頷く。

「まずはね。一安心だったわ」

「けれど。こんな理由だったとは思わなかったよ」

「私が自分の身体を見せたいと思っていたから」

陽子はそう呟いて俯いてしまった。

「あんなものができたなんて」

「まあね。これは俺も驚いたよ」

敦もその言葉には同感だった。何時になく真剣な顔だった。

「そうやって思っていると浮き出てくるものだったのか」

「そうね」

「それで。やっぱりもう派手な服はね」

「わかってるわ」

陽子は心底懲りていた。もう着るつもりはなかった。

「こんなことになる位なら」

「そうだね」

「派手な服も着ないし」

「思いもしないってことだね」

「辛いことだけだね、私にとって」

そしてここで苦笑いを浮かべた。

「このスタイルが自慢なのに」

「けどさ、人に見せなかつたらそれはそれでいいじゃない」

「じゃあどうすればいいの？」

「俺にだけ見せてよ」

「敦君にだけ」

「そうさ。それならいいだろ？」

ちらりと陽子に目をやって言う。流石に運転中なので顔を向けることはしなかった。今二人は山の中の高速を進んでいる。回りを車が派手に飛び交っている。

「俺一人にだけ。どうかね」

「ええ、いいわ」

陽子はその言葉に答えた。そしてにこりと微笑んだ。

「敦君にだけね、見せてあげるわ」

「うん」

「私の自慢のプロポーション、それならいいわよね」

「そうだね、派手に露出するんじゃないし他の誰かに見せるんじゃないし」

「それじゃあさ、部屋に着くの明日よね」

「このままいけばね。今渋滞もないし」

「明日帰ってもまだ休み二日もあるのよ」

「それじゃあ」

「その二日。部屋で楽しみましょ。敦君と私だけで」

「いいねえ、それで」

「でしょう？だから」

「よし、飛ばすか」

敦のアクセルを踏む足に力が籠もった。そして派手に飛ばしだす。

「陽子ちゃん、楽しみにしてるからね」

「ええ」

二人は笑っていた。そして部屋へと急いで帰る。

それから陽子は派手な服を止めた。地味な格好ばかりするようになり自分を抑えた。その結果はわからないがそれから人面瘦が出ることは二度となくなった。そして敦との仲は一層よくなった。そのまま二人は結婚し幸せになったという。思えば人面瘦は陽子にとつて一時の不幸だけでしかなかった。彼女を抑え、幸せをもたらすもとなつたと言えるものであった。何がどう災いとなり、どう幸福となるのかは誰にもわからないことである。

人面瘦 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2924f/>

人面瘦

2010年10月8日15時59分発行